平成8年（1996年） 4月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

4 APRIL,1996 毎月10日発行 第192号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1996
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

キリストの十字架・神の愛のしるし

★「見よ、十字架の木…」十字架。十字架の木。今日、教会全体は世の救い主キリストが架けられた十字架に注目します。さあ、礼拝しましょう。教会は十字架をあがめ、全ての世代、全ての人に及ぶその救いの力を宣言します。

私たちは聖ペトロ大聖堂を出発し、コロセウムにやって来ました。心の中で祈りの文句が響いています。「見よ、十字架の木、世の救い。ともにあがめ、たたえよう。」

このコロセウムで、私たちもキリストの十字架の道をたどりましょう。十字架の道は人類の歴史と共にあります。

★四旬節の始まる灰の水曜日、聖パウロはこう言っています。「キリストによって切に願う。神と和睦してとどまれ。神は罪を知らなかったお方を私たちのために罪となされた。それは、私たちをその方において神の正義とするためである。」（IIコリント5・20～21）心に響くこの言葉は今日、成就したのです。罪のない方が「罪とされる」ことが可能だったのでしょうか？「まことに聖なる方」が？ ところがその方は自ら罪を負われたのでした。「主は皆の罪を彼の上に負わせられた。」（イザヤ53・6）そして彼は言葉に尽くせぬこの重荷を十字架の形で担い、ゴルゴタへと登り、その十字架の上でいけにえとして生命を捧げました。これが十字架の木です。

十字架は、さながら普遍的な告白、つまり全てを告白するもののようです。それは誰も成しえない罪の告白で、絶対的なものです。十字架は「世の罪」を全て、最も奥に隠れた根源までを含んでいます。

世の罪をことごとく身に負ったキリストは、無限の愛で罪に勝ちました。その愛には贖いの力があります。「あなたは十字架と受難によって世を贖われた。」こうして人類の歴史の中でキリストの十字架は、罪を取り除くしるしとなっています。

聖金曜日の最後に当たり、英雄的な殉教者たちの歴史を刻んだ古代ローマのコロセウムに集うのは、意義あることです。

ここローマ、皇帝たちの遺跡で、人は十字架の秘義をとりわけ深く悟ってきました。キリスト教の初期、キリストのため生命を捧げた殉教者たちは、十字架の力を証言することを決してやめませんでした。一人ひとり全員がキリストのために、自らの体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たしたのです。（コロサイ1・24参照）

遺跡となったコロセウムは、このことを語り続けてやみません。神の他に満たすことのできないような、巨大な空間がぽっかり開いています。そこには、さまざまな仕方でキリストの苦しみを満たそうとする全ての人が集まり、十字架を見上げています。おそらくは自分たちが同じ贖いをもたらす愛、限りない愛に包まれていることすらも知らぬままに。

「見よ、十字架の木を。」（九二・四・十七、ローマ・コロセウムでの十字架の道行）

聖土曜日 からの墓とご復活

「その昔、神は何度もいろいろな方法で…語られた。」（ヘブライ1・1）

この復活祭前夜、教会は神の声に耳を傾けます。偉大な創造の預言、アブラハムのいけにえ、エジプトの奴隷からのイスラエルの解放の物語に耳を傾け、預言の言葉に聞き入ります。

「神は何度もいろいろな方法で、その昔預言者を通じて語られたが、この終わりの日々には…その子を通じて語られた。」（同1・1～2）

御子の言葉が福音です。福音の最後の言葉が、復活祭の言葉、つまり「今夜」なのです。そして夜が明けて朝になり、墓が空になっているのを婦人たちが発見した時、「なぜ死者の中に生きた御方を捜しているのか。主はここにはましまさぬ。よみがえられた。」（ルカ24・5～6）という言葉を耳にするでしょう。

婦人たちに続いて急いでやって来たペトロも、同じことを目撃します。

「子が何者かを知っているのは父の他にはなく、父が何者かを知っているのは、子と子が示しを与えた人の他にはありません。」（マテオ11・27） カルワリオのふもとに残された空の墓は、復活の前に父が子を通じて示された、最後の言葉です。

「死者からよみがえられたキリストはもう死ぬことがないと

説教・講話・書簡等の抄訳

私たちは知っている。…キリストにおいて死んだ者は一度そして永久に罪に死に、生きる者は神のために生きる」と使徒パウロはローマ人への手紙の中で語っています。（6・9～10）

エルサレムの婦人たちは、十字架につけられた御方の息絶えた体に塗るために「整えた香料を持って」夜明けに墓へ行きました。（ルカ24・1）今夜私たちは、キリストの光を象徴する過越のろうそくの祝された光に照らされて、復活の前夜を迎えます。そうです。主は福音の言葉で私たちの人生を照らす方、その同じ方が復活の夜に、生命の光で人間の死をも照らしてくださるのです。

私たちはこの生命の旅路を歩んでいます。復活祭の夜の闇を抜け、「私の魂は神に、生きる神にかつえる」（詩篇42〈41〉・2）と歌いながら歩むのです。

このようにして私たちは水源へ、新たな誕生の泉へと近づきます。生まれ直す必要があるからです。（ヨハネ3・3参照）生命を与える聖霊の力によって、キリストの死から生まれなければならないからです。

「洗礼を受けた私たちは皆」（ローマ6・3）、水と聖霊による再生を果たそうとしている人々を喜び迎えます。私たちを「イエズスと共に葬った」（同6・4参照）同じ洗礼の秘跡によって一つに結ばれるのです。

聖なる洗礼の水に浸された私たちは、共にキリストの贖いの死にあずかります。私たちは「洗礼の時キリストとともに葬られ」ました。（コロサイ2・12）それは「御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえったように、私たちもまた新しい命に歩むため」（ローマ6・4）なのです。

これこそ、偉大な信仰の神秘。「もし私たちがキリストとともに死んだのなら、また彼とともに生きることをも信じる。」（同6・8）

全教会はこの信仰によって生かされています。同じく私たちも、ここ聖ペトロ大聖堂に集い、この復活祭の夜、洗礼を通してもたらされるよみがえりの秘義に共にあずかり、皆さんと共に生かされます。

この信仰の光に照らされて、心からのご挨拶を皆さんに贈ります。皆さんと共に私からの敬愛の念が皆さんの故国、日本、韓国、中国、イタリア、ベトナム、フランス、アルバニア、クロアチア、アメリカ合衆国、モロッコ、ロシア、ペルー、イギリスに届きますように。

受洗者の皆さんが世界各地から来られたという事実は、キリストによる贖いの普遍性を明らかに示しています。キリストが世にもたらしたメッセージに、限界はありません。

「主をほめよ、主は慈しみ。」（詩篇118〈117〉・1）

神がその昔預言者によって、今は御子によって語られた御言葉の成就に感謝を捧げましょう。キリストだけが神の神殿の「隅の親石」（エフェゾ2・20）です。「みことばに生命があり、生命は人の光であった。」（ヨハネ1・4）主こそ私たちの光！

（九二・四・十八）

教導職はキリストの御名において権威を用いる

■（…）教導職は、書かれ、伝えられた神の言葉の解釈に関する権威と最終審査権を有していますが、それは信仰の一致を守るためです。信仰の一致が何よりも大事であり、それを尊重することは神学研究の抑圧にはならず、かえって研究に確かな土台を提供します。神学は知りえる信仰の内容を解明するにあたり、人間の知性に備わった真理への志向と、啓示された秘義を理性で探求したいという信者の押さえ難い要求を示すことになります。

この目的を果たすには、神学が個人的あるいは学者うちの「私的な」考察にとどまるわけにはいきません。教会は神学者にとって不可欠な環境であり、神学がその名にふさわしくあるためには教会生活を織りなす教理・聖性・祈りなどと深いつながりを保たねばなりません。

教導職は真理への奉仕

■神学が教導職による生きた、明らかな指示を必要としていることは、このような状況において十分に理解することができます。キリスト教信仰の論理とも完全に一致しています。教会教導職というものの意味は、キリスト教の真理と関連して考えるべきです。これは、神学者の教会への召し出しに関する教書「ドヌム・ヴェリタティス」の中で注意深く詳細に説明されていることです。

第一バチカン公会議の荘厳な教義決定に至るまでの教義上の発展は、教導職がもつ不可謬性のカリスマ（賜）を強調し、不可謬性が発揮されるための条件を明らかにしました。しかし教導職はこの観点からのみ考えられるべきではありません。実に教導職の力と権威とは、教導職が証言するキリスト教の真理がもつ権威のことなのです。

教導職の権威はイエズス・キリストの御名において行使されます。（啓示憲章、10番参照）また教導職は真理に仕える機関であり、真理が人間の歴史を通していつまでも忠実に伝えられるよう見守る責任を負っているのです。

■今日、教会教導職の意味と役割について間違った考えが広まっていることに注目しなければなりません。指摘されるように、これが教会の最近のいくつかの宣言に対する批判や抗議の原因になっています。道徳の教えと生命についての諸原則に関する回勅「真理の輝き」、犯すことのできぬ生命の尊さに関する回勅「生命の福音」、女性への司祭叙階が不可能であることを述べた使徒書簡「司祭叙階」、さらには「離婚

◆「聖なるロザリオ」（定価一二三六円）・「十字架の道行」（定価一二〇〇円）
ホセマリア・エスクリバー著、精道教育促進協会スタッフ訳。お申込み・お問い合わせは当協会まで。送料は一冊三〇〇円、二冊以上五〇〇円です。

説教・講話・書簡等の抄訳

信徒は現世を刷新する

教会シリーズ 33

者と再婚者の聖体拝領」に関する教理省の書簡など、最近の教皇文書に対する神学者やその他の教会人の反応がそれです。

ここで、協力精神と教会的交わりの精神から難点や疑問を出し、積極的に信仰の遺産についての考察を深めるのに貢献する神学者と、反対派と称せられ、公に教導職に反対する人々とを区別しなければなりません。この二番目の人々は、信者の方々に、教会の教えとは異なる教えや行動形式を提示する、一種の対立教導職を形成しています。文化の多様性と神学の方法や体系の多様性が正当であるのは、信仰の一体性が本来の意味で守られている場合だけです。神学研究に固有の自由とは決して信仰の真理に関する自由ではありません。ここでいう自由とは、啓示が示す真理に従い、信仰をもってそれを受け入れるという道徳的な義務を果たして初めて成り立つものなのです。

■ 同時に、（…）今日大切なのは教導職の文書を積極的に受け入れられるような雰囲気を作ることです。そのために、文書の文体や表現に注意を払い、文書に含まれている教えの堅固さ・明瞭さという面と、現代人の意識に鋭く、また効果的に伝わるよう選ばれる伝達の形式や手段とが、調和を保つことができるようにすべきです。

ところで、教会のある人々の間で見られる不安感と不快感の底に、決定的に大切なことがあるのを見逃してはなりません。それは、権威とは何かという問題です。教導職の権威は不可謬性のたまものが行使される時だけに発揮されるのではありません。教導権は、啓示された遺産を適切に弁護する必要のあるとき、もっと広い範囲にわたって行使されるのです。

本質的に神のおことばへの忠実を基盤とする共同体の中では、信じられるべき事柄と宣言されるべき事柄を決定する権威は、決して放棄されるべきではありません。そしてこの権威にはさまざまなレベルのあることが教理省の最近の二つの文書、すなわち信仰宣言と「真理のたまもの」に明記されています。教えに段階（レベル）のあることは、神学にとって、教導職の教えを受け入れるための妨げになるどころか、かえって刺激になるべきことです。

権威についての正しい考えを回復させよう

■ しかし、「教導職による教理上の決定と宣言とは荘厳な判断や最終的な行為の時のみ変更のできない最終的な同意を要求するもので、それ以外の時は使用されている立論や理由を単に考慮するだけで良い」という考えは認められません。

「真理の輝き」と「生命の福音」という二つの回勅、および使徒書簡「司祭叙階」で、私は聖書と使徒聖伝そして教会の教父たちが一致して教えてきた真理を確認することによって、教会の不変の教えをふたたび提示しようと考えました。「兄弟たちの信仰を固め」るため（ルカ22・32）、ペトロの後継者に伝えられた権威のもとに出されたこれら宣言は、こうして教会の生活と教えの中にある共通の確信を表わしています。

というわけで、権威とはなにかについての正しい考えを回復することが緊急に必要となります。形式的な法律上の観点からだけでなく、もっと深く考察されなければなりません。すなわち権威とは、キリスト教共同体が聖伝に対する忠実と聖伝との継続性を保つことができるよう保証し守る手段であるという事実を理解しなければならないのです。こうして信者の方々は、使徒たちの教えとキリスト教という現実の源泉とに絶えず接触を保つことができるようになるからです。（…）（教理省のメンバーへ、九五・十一・二四）

1

（…）機構であれ、価値観や行動であれ、それらが直接この世の生活に関わる限りにおいて、「現世的」と呼び慣らわされてきた現実があります。もちろんそれらは同時に永遠の生命に向けられていることに変わりはありません。今の世は、見せかけや偽りの影でできているのではなく、来世との関連だけを考えればよいというものでもないのです。第二バチカン公会議は宣言しています。「この世の秩序を構成する全てのものは、ただ単に人間の究極目的への手段としてだけあるのではなく、神から与えられた固有の価値を持っている。」（信徒使徒職に関する教令、7番）聖書の創造の場面には、この世の価値は神が認め、望み、立てられたものという記述が見られます。「神はそれ（被造物）をよしと思われた」（1・12、18、21）だけでなく、男と女を造られたあと、「これをよしとして満足された」（創世の書1・31）のです。託身と贖いのわざがこの世の事柄の価値を引き下げたり否定することはありません。贖い主のわざが創造主のわざと対立するはずがありません。むしろこの世の価値は「全てのものをキリストの下に集め」（エフェゾ1・10）、「子によって、子において全てのものを和睦させ」（コロサイ1・20）る神のご計画に従い、元通りに高められたのです。だから万物はキリストによって存在する、と言えるのです。（同1・17参照）

信徒は個人と社会に奉仕する

2

とは言え、歴史に見られる悪、人間の罪を無視することはできません。罪とは、人祖の最初のつまずきとそれによって生じた子孫代々にわたるつまずきという啓示を通してしか理解することができないものです。「歴史の流れにおいて、この世のものはひどい悪用によって汚された。」（信徒使徒

不変の教え

職に関する教令、7番）今日もなお、神の計画と命令よりもむしろ科学や技術の進歩によって物事が支配され、科学技術の力を過信するあまり、多くの人がその奴隷となって、深く傷ついています。

人間がこの世の事柄の全秩序を正しく打ち立て、それをキリストを通して神へ秩序づけうるよう助けることは、教会の務めです。（前掲書参照）こうして教会は全ての人と、「人と社会に奉仕する使命に参加する信徒」（「信徒の召命と使命」36番）に奉仕するものとなります。

3

（…）信徒は何よりも人間人格を尊重し、助けるという使命を有することを思い起こすべきです。これは今日、とりわけ急を要する要請です。問題は人間を守る（時には回復させる）ことです。人はまさに人間であるという理由ですこぶる価値あるものであり、決して「利用される対象や道具、物のように」取り扱われてはなりません。（同37番）

全ての人は、人格の尊厳という点から見て平等です。人種や性別、社会・経済・文化・政治や地理に由来するどんな差別も許されません。各自が生まれ、暮らしている時代や場所によって生じるさまざまな状況の違いを、生き生きとした人間的・キリスト教的な支援で埋め合わせることは、連帯のための義務です。それらは具体的な正義や愛のわざとして現われるべきです。聖パウロはコリントへの手紙で説明しています。「それは他人を楽にしてあなたたちを貧しくすることではなく、つり合いを取らせるためである。今あなたたちの豊かさが彼らの不足を補えば、彼らの豊かさがあなたたちの不足を補うことになり、つり合うようになる。」（IIコリント8・13～14）

4

人格の尊厳を促進することは、「人間の権利を尊重し、擁護し、促進すること」（「信徒の召命と使命」37番）につながります。何よりも人命の不可侵性を認めること、生きる権利が必要不可欠で、「もっとも根本的で基礎となる権利、全ての他の個人的な諸権利の条件である」（同）と見なすことです。ですから「すべて生命そのものに反すること…すべて人間（ペルソナ）の十全をおかすこと…すべて人間の尊厳に反すること…これらのすべてと、これに類することは…創造主に対する侮辱である。」（現代世界憲章、27番）創造主はご自分に似せて人を造り（創世1・26参照）、つかさどろうとお考えになったからです。

人格の尊厳と生命の権利を守るというこの特別な責任は、親、教育者、医療関係者、経済的政治的権力を担う全ての人に課せられています。「信徒の召命と使命」38番参照）教会は特に、生命倫理の新しい諸問題が突き付ける挑戦に立ち向かうよう、信徒を促します。

5

守られ、促進されるべき個々の権利の中には、良心の自由、礼拝する自由と並んで信教の自由があります。（同39番参照）社会は、個人が自らの確信を述べ、公の秩序が要請する正しい範囲内であれば自分の宗教を実践する権利を保障すべきであると教会は主張してきました。（信教の自由に関する宣言2番、7番参照）いつの時も、この権利を守り、推進した殉教者たちのいなかった時代はありません。

信徒は能力や時間的・場所的な条件に応じて政治に関わり、全て必要な共通善を促進し、また特に個々の市民への奉仕という形で正義を実行するよう召されています。使徒的勧告「信徒の召命と使命」が述べるように、「個人と社会のための公共生活の活動指針は、正義の擁護と促進の道です。」（42番）地上の住人全員のものであるこの活動において、信徒は個人的な利得を求めず、非合法な手段で特定の集団や党派にくみしない公正な政治的行動の模範とならねばなりません。政治的な不正は、最も高貴で神聖な理想さえも無に帰してしまうのです。

6

信徒は、平和な世界を取り戻そうとする社会的な努力に背を向けてはなりません。信徒にとって、それはキリストがお与えになった平和（ヨハネ14・27、エフェゾ2・14参照）を社会・政治の次元で、個々の国や世界で実現することです。人々がますます平和を求めるようになった今、利己主義や憎悪、報復、敵対に満ちた文化を克服し、あらゆる段階での連帯の文化の発展を目指す、行き届いた教育事業を促進するのが信徒の使命です。（同42番）

どんな分野においてでも福音を伝え得る

経済と社会の発展のために努力することも信徒の仕事です。これは、個人の尊重、正義、連帯、兄弟愛の要請です。全て善意の人々と共に協力し、どんな社会体制のもとであっても普遍的な善を目指すことは、信徒の務めです。また働く人の権利を守り、増大する深刻な失業問題への正しい解決方法を探り、あらゆる不正を克服することも、信徒に課せられた役目です。信徒はキリスト信者として、教会の社会教説をこの世で実行しますが、各自が意見を持つ上で個人的な自由と責任があることを知らねばなりません。たとえ福音的な価値に鼓舞された意見であっても、それを唯一のキリスト教的な解決として示すことはできません。自分とは異なる意見や選択でも、正当であれば尊重することも、愛の要請です。

7

最後に、人類の文化とその全ての価値を発展させることも、信徒の務めです。科学、芸術、思想哲学、歴史研究など様々な分野に、信仰から得た霊感を吹き込むのです。さらに、文化の発展につれてマス・メディアの役割がだんだん大きくなり、人々の心や行動を決定づける重大な要因となっているため、出版や映画、ラジオ、テレビ、劇場の仕事に携わる信徒は、世の終わりまで福音を宣べ伝えよという命令を常に心に銘じつつ働く責任を負っています。これは今日の世界において特に問題となっていることであり、イエズス・キリストが全ての人のために開いた救いの道が早急に求められているのです。

（同43番参照）

（九四・四・十三）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部百八十円　（送料とも）
■一年予約　送料とも二、〇五〇円から。詳しくは精道教育促進協会まで。
郵便振替
01130-
8-72393